



係^ボ留^リ杭^ドに足置く男春鷗
 春深し爪切る足の指遠し
 青春の夢遠ざかる師走かな
 言ふなれば阿修羅のひと世鳥帰る
 木の根明く死者に呼吸のあるごとし
 ふきのたう呆けウイルス禍の都市よ
 比良八荒鯰は髭で夢見しか
 青春は麦踏むのみに終りけり
 春眠り明けぬ夜もあるかもしれず
 春霖や轆轤に壺の手暗がり
 モンゴルの骨占ひや月おぼろ
 支^ド石^ル墓^メをゆつたり包む春霞

*

熊穴を出づ花金といふ昔
 制服のせえのでジャンプ卒業す
 早春の海が見たくて常磐線

小林貴子
 奥山源丘
 住斗南子
 古畑恒雄
 田中純子
 栗原利代子
 樋上照男
 永島理江子
 柿谷有史
 広枝千鶴子
 志村寿美代
 田添博美

辰野利彦
 田中優子
 荒川睦子

石鹼玉切手料金今いくら
 淡雪や頭は頸に支へられ
 梅白し父母との日日の短かり
 泥鰌掘る指に眼のあるごとし
 声高に薨越えゆく春の鶉
 山のごと海のごと生き水仙花
 咳一つすれば席空く山手線
 土場芸の春を呼び込む百面相
 高跳びの背の弓なり春の土
 入学や打てば真直に入る釘
 春山へ入りて家出をせし思ひ

*

城壁に騎士のこちや花蘇枋
 春満月鼻突き出して檻の象
 いそぎんちやく噂話を聞き元氣
 仲春やカッパドキアに瞰の気球

柴崎美智子
 小熊旭
 珠風夕波
 青木豊子

岸元忠義
 平澤寿美枝
 酒井和子
 土屋敏弘
 木澤つとむ
 渥美人和子
 三浦土火
 堀内ただを
 佐藤由美
 田中とし子
 小野す美

岳の源泉 五月

489

——同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。人を見たらコロナウイルスと思え。疑い深くならない。なによりも自分自身の生き方が不安になる。どうしたらいいか。

自然を見直す。外出自粛であるが、身辺の一本一草を見つめる。庭の草を取る。庭がなかったら、窓から雲の流れを長い時間かけて凝視する。自然を見直すことで普段気付かない自分の中の「狂気」を覚ます。人との付き合いには知らず知らずに仮面を被る。付き合わなくなれば、仮面を外すチャンスではないか。狂気こそ正気なのである。正気の眼で見つめると、自然は健気だ。愛らしい。本来、喧騒の中で自然の優しさに気付くのが本物の俳人であったが、昨今、崩壊しかけた地球に宇宙の造物主が最後のチャンスを与えてくださったようだ。

杭に足を置く男とは——内面を想像させる

係留 杭に 足置く 男 春 鷗 小林 貴子

波止場の船杭か。春の鷗が群れる近海公園の進入禁止の杭ともとれるが、係留杭は前者か。一見古風な裕次郎風の海の男性像が浮かぶ。内面をなにも描いていないが、この歩みを留めた姿がすべて。実存なのである。前にも行けない、後ろは海。ぎりぎり。ここにもコロナがある。残された道は狂

気。寅さんとは違う。その辺の描き方が巧い。

青春の夢遠ざかる師走かな 住 斗南子

どっと齡をとった感慨である。盆暮れ勘定に慣れ、長く呉服を商ってきた老舗の作者に師走は格別。今は楽隠居の身。寮歌に明け暮れた青春、結婚してからは手堅い細君が店を切り回す云々と伺うと、自身、長生きをしたと思う。

言ふなれば阿修羅のひと世鳥帰る 古畑 恒雄

「悼 宮城まり子さん」と前書がつく。私は宮城まり子のこととは一切知らない。吉行淳之介は本妻がいながら、まり子と同棲した、さらに他に女性がいするなど、吉行作品を愛読した経験から吉行に関してこれくらいことは知っている。が、障害児施設を大きくし、吉行を愛し、九十年の生涯を終えたまり子に、弁護士として献身的に尽くされた古畑先生が一言「阿修羅」のことを贈り悼む。吉行ではなく、宮城まり子には深い愛情表現であったと思う。

木の根明く死者に呼吸のあることし 田中 純子

春先の大地の生気がいま亡くなった者にまで、現世ではなく、他界に生きるために齎された。新しい死生観がある。わ

が意を得た見方に感動した。語れば長いので、一言だけ記す。人は死の時間に生きるのが本来の宇宙時間、この世での生存は死の時間の助走だったのではないか。

ふきのたう 呆けウイルス禍の都市よ 栗原利代子

春が深くなる。露の臺も茎が伸び臺が立つ。セシウム汚染のフクシマがそうであった。誰も摘み手がいない。臺が聳えるほど。がらんとし異様だった。いま、またウイルス禍の都市が無人の戦場とは。地球は宇宙から試されているのである。

比良八荒鯨は髭で夢見しか 樋上 照男

三月末、琵琶湖の北西に聳える比良山系から吹き降ろす荒い風。湖の鯨は髭がアンテナ。ぼつぼつ春じやなとさぐりを入れる。喧騒な世に鯨への気遣いができる。ただ者ではない。

青春は麦踏むのみに終りけり 永島理江子

今月の秀句

春深し 爪切る 足の指遠し 奥山 源丘

季語におかしみがある。爪を切ろうとした。足の指まで手が届かない。こんなはずではなかった。再度試みる。駄目だ。わが身のうちながら、勝手に足の先がかくも遠くなる。遠い感じに愕然とする。齡の深まりを春深しと洒落た泣き笑い。

『寺山修司の一九六〇年代——不可分の精神』（堀江秀史）と

いう五百頁を超える大著に唸っている。わが青春が安保時代。一度しっかり見直したい気持からだ。その時代、寺山はとびぬけた知的感性を全開させ、時間を駆け抜けた狂気の男。寺山とともに俳句を作り合った永島さん。筑波山を仰ぎ、麦踏みが青春との回想に、かえって挫折を抱えた鋭い自省の気持が籠る。

春眠り明けぬ夜もあるかもしれず 柿谷 有史

視覚障害に透析と降りかかる労苦を母の献身的な援助により生き抜くと日夜奮闘。母子ともに見事。心から励ましたい。掲句は身から絞り出す実感であろう。ことばがない。

春霖や轆轤に壺の手暗がり 広枝千鶴子

陶芸家の本業を詠む。春の長雨のさなか、一抹の不安、手暗がりのあたりが気になる。微妙な意識が勝負どころ。

モンゴルの骨占ひや月おぼろ 志村寿美代

シャガイという骨占いが知られる。馬・羊・駱駝・山羊のくるぶしの骨で占う由。モンゴルの草原に揚がるおぼろ月を思い浮かべ、シルクロード以来の悠久な時間に惹かれる。作者は体調を崩されたと聞く。お大事に。

支石墓をゆつたり包む春霞 田添 博美

飛鳥の石舞台のような巨大なテンプル状の石を置いた墓。新石器時代以来鉄器時代まで、ユーラシア大陸に見られる。

構想が大きい。ここでも死の時間への暗黙の関心がもとな
っているであろう。却って生きるとはなにかが問われる。
他に同人集からの推薦候補作を掲げる。

あちこちに潜める子ども木の芽時 五味 真穂
清貧を貫く眼木の根開く 荻原 昭廣

制服のせえのでジャンプは中学の卒業か―その軽さ

制服のせえのでジャンプ卒業す 田中 優子

これが学生時代の通過点。女子中学生か。制服を着てみ
なが「せえの」と掛け声でジャンプする。明るく、他愛もな
さが面白い。みんなちりぢり。みんな同じ地点に立つ。これ

今月の秀句

熊穴を出づ花金といふ昔 辰野 利彦

春に穴から出た熊の人間世界への感慨がユニーク。い
ま世は新型コロナウィルスとか、てんやわんや。ウイル
ス騒ぎも思えば長い。昔、金曜日は花金と呼ばれたな
あ。明日は土曜、日曜が続き、居酒屋は大賑わい。呑ん
で顔に唾の飛沫。わいわいがやがや。ところがいまや金
曜も自粛。花金なぞ夢の夢。時代は大きく変わる。熊の
方が人間よりも生き生き。

声高に薨越えゆく春の鶴 木澤つとむ

句の姿が真正面を向き、堂々たる立句。格調が見事だ。
他に岳集から推薦候補作を掲げる。

山のごと海のごと生き水仙花 渥美人和子
咳一つすれば席空く山手線 三浦 土火

コロナの世はかくの如し。川柳と俳句の境はないコロナ詠。
土場芸の春を呼び込む百面相 堀内ただを
大道芸人の春、芸はマスク。必死の百面相が逞しい。

高跳びの背の弓なり春の土 佐藤 由美
美しい。高跳びは張りがいのち。俳句も同じ。

入学や打てば真直に入る釘 田中とし子
素直この上ない比喻。大事な入学期コロナ休校とは切ない。
春山へ入りにて家出をせし思ひ 小野 す美
すっかり春。山へ入る。冬山とは格段に違う。比喻が巧み。

今月の秀句

城壁に騎士のここちや花蘇枋 柴崎美智子
城壁からナイトの気持を連想する自在さに感心した。

からが人生の分かれ道。大人の発想ではない。そこがいい。
早春の海が見たくて常磐線 荒川 睦子
上野から海岸伝いに仙台まで、常磐線が再開通した。しば
らくぶりに春早い海を見たい。とことこ走る常磐線に乗る。
単純この上ない句。それが新鮮。地元の者の実感がある。

石鹼玉切手料金今いくら 岸元 忠義

洗濯をしながら、手紙を出してなかったことが気になった
ものか。切手料金は今いくらだったかしら。消費税一〇％に
なり郵便料金も上がる。これが重さでまちまち。石鹼玉には
夢もある。一口最中でも食べたような軽さ。これも俳句。

淡雪や頭は頸に支へられ 平澤寿美枝

なぜ淡雪か。冬の間運動不足で頸の調子がダウン。春を迎
え、ようやく気にならなくなる。日常の細やかなことを季語
に托したセンスがいい。頭と頸との主従関係への着想が抜群。

梅白し父母との日日の短かり 酒井 和子

梅は百花の兄。早く咲き、気品がある。梅は縁を思わせる
花か。人生大方を過ぎると、誰もがわが原点、素が気になる。
もう一度父母との暮らしをしたい。痛切な思いが共感を呼ぶ。

泥鰌掘る指に眼のあるごとし 土屋 敏弘

季語が気になる。文化は長く近畿京都中心。歳時記では
冬だが信州辺では秋か。生活を主にした地貌季語である。

他に岳集推薦候補作を掲げる。

おぼざしや星の間を泳ぎをり 三品 吏紀
黄梅やモリスの布の唄ふごと 内堀紀香子
轆轤をプロパンボンベ聞いてる 市原 啓子
春浅し頭のてつべんに鍼打たれ 長崎 玲子
母の死の整うてゆく春灯 野口美智子
白鳥の飛ぶに助走の逞しき 滝川 陽子

青雲集―なつかしきカッパドキアの春

仲春やカッパドキアに噉の気球 青木 豊子

トルコのカッパドキアの春。蟻塚の連なりのような家の上
空に早朝、気球が揚がる。不思議な思いに誘われる。そこで
私は老婆が刺繍したテーブルクロスを買った。千円と高い
が、私の世界を広げて貰ったお礼に。作者の思いが伝わる。

春満月鼻突き出して檻の象 小熊 旭

構図が巧み。象が一番自然に還る時間か。詩想が明快。

いそぎんちやく噂話を聞き元氣 珠風 夕波

句に艶がある。俗事を掬い上げる才能横溢。二十代の新進。
他にこんな青雲集の句に注目した。

着信の絵葉書立てておく日永 角田 良子
たちまちに砥めずる野火の隙のなき 原 隆子
大空に国境は無し霾れり 荒木 仁

推敲・添削 ⑥4

宮坂 静生

○気になる表現 美術館詠の難しさ
例句 春の雨広重想ひゴッホへと

カーデイツの城にはためく夏の龍

前句には前書「下山芸術の森発電所美術館にて」が付く。
富山県入善町にある大正十五年建造の北陸電力所有の発電所を美術館に移行。珍しい美術館での名画詠。そこで作者が気になったのはこのような作句は見ない人に判って貰えるかという疑問であった。私の体験からいうと、着想はいいが、作者が感動するほど人は感動しないということである。わかりやすく詠うと平凡。感動を手放しで表現すると、人は理解できない。掲句からそんな感想を抱く。芸術品の彫刻や絵画を句材にすると、成功すれば凝った句になる。しかし瑞々しさが乏しい。句碑や石仏なども同じことがいえるようだ。

○このように推敲し添削―語順を工夫し、リズムを生かす

原句 聞いてゐるプロパンボンベ囀りを

市原 啓子

添削 囀りをプロパンボンベ聞いてゐる

原句 地球破る嘴の勢ひたかなよ

添削 たかななの地球を破る勢ひかな

梶原 夢乃

「破る」(やる)「嘴」(サイ)のルビがつく。不要。自然に。

原句 砂州大樹きりりころろ河原鶉

市川 敬子

添削 砂州大樹きりりや河原鶉ころろ

「や」切れを入れた方が変化がつくのではないか。
表現を凝らないで自然の面白さを工夫する

原句 鍵穴に秘密つめ込む朧の夜

飯田 和子

添削 朧夜の秘密に鍵を掛けにけり

「秘密つめ込む」は凝りすぎ、強引ではないか。優しく。

原句 枯れた葦かわせみ一羽色添える

佐藤 悦雄

添削 枯葦にかわせみ撓い離れざる

手短に表現し、どんな光景が面白いのか、表現に工夫を。

原句 春一番高し高しへ鳶昇り

青木 孝夫

添削 春一番高きへ鳶の昇りをり

「高し高しへ」は表現文法、リズムが不自然。優しく。

原句 潮の香の光風と海人東風迎ふ

松岡 善郎

添削 潮の香の満ちるや海人の東風迎ふ

「光風」「東風」と風を両方出すとイメージが単調になる。

原句 椿落つつと身繕ひしたやうや

佐藤 光子

添削 椿落つつと身繕ひいたしけり

原句 病犬に最後の毛布となりにけり

大崎 弘子

添削 病犬に最後の毛布かけにけり

前句「したやうや」は説明調。後句は添削の方が自然か。

原句 水温むコーヒー飲みに出かけ時

岡本 哲彦

添削 水温むコーヒー飲みに出かけたし

原句 隧道を抜ければ海道花明り

荒谷 頼明

添削 隧道を抜け海道や花明り

前句わるくない。こんな言い方も。後句は中七音に。